
女忍者～呪われしき宝石頂戴グループ～

如月水木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女忍者〜呪われしき宝石頂戴グループ〜

【Nコード】

N4026D

【作者名】

如月水木

【あらすじ】

美白端正お嬢飛鳥 アスカ が、どこまでもマイペース人瞳 ヒトミ、スタイル抜群リーダー楓 カエデ、男前すぎる海実 ウミ、和やかな空気の持ち主沙理 サリ と一緒に女忍者になる？！任務は上手くいくのか？そして飛鳥はどんな風にな変わっていくのか？

プロローグ（前書き）

もちろんフィクションです^^
大長編になる予定ですが
気長につきあってください（
・
・
）

ブローグ

「飛鳥っ！飛鳥っ！」

肩から溢れ出す血。それは今までに見た事無い鮮色で。

痛い？

全然。痛いという感情よりも先に痺れが襲う。

「うう。。」

でも、終れない。

止まらない。

「待てや、おいっ！」

楓のアルト声が遠くに聞こえる。

敵、捕まえるから、お前はそこで生きろ。

聞こえない言葉。伝わってくる言葉。

「飛鳥っ！んな所で終るのか？」

私は、まだ、おわれない。

ワタシハマダオワレナイノニ

でも、でも 頭が、意識が飛んでいく。

「飛鳥さん、飛鳥さん、まだ、お願いです！寝ないでくださいっ！」

薄っすらと重い瞼の下から見える光景。

目の前にいるのは、沙理？

もの凄いスピードで駆け寄り、長いスカートのスリットの部分から救急セットを取り出し私の肩に触れる。

「お願いです。飛鳥。まだ、寝ないでください！」

叫びともいえる声。嗚呼、駄目…眠い。。

「飛鳥さんっ！私、あの、失いたくないんですっ！失いたくないんですっ！」

小さな目に溜まった涙は、私の額に落ちた。

「飛鳥さ、んっ！」

分かっている…まだ、私やらなくちゃいけないのにね…。でも…この眠気には…。

『バチン！』

軽く鈍い音。全く痛さは感じないが、どうやら頬を打たみたいだ。ん？そういえば……私初めて人に頬を打たれたな…。

「あ、飛鳥さんっ。飛鳥さ、ん。」

「お 起きてるわよ、うっさいわねえ。」

どうやら肩に刺さっていた矢を抜いたらしい。急に意識が遠くなくなった。

宝魚島お嬢様

初夏。宝魚島　ホウギョトウ　では、大騒ぎが始まる一歩手前だった。

「飛鳥　アスカ　嬢、ご気分はいかがなさいますか？」

「……………普通。」

「お腹の方は空いていらつしやいますか？」

「別に。」

「他に何か申し付ける事はございませ・・・」

「あああ！うっさい！無いからっ。」

「しかし・・・」

「私が無いつて言っただらないのっ！」

「さようですか。ならば、失礼さして頂きます。」

「……………早く行け。」

色とりどりのダイヤモンドや光り輝く金の粒が散らばっている椅子の上。

私は独り、無性に湧き上がる苛々をそのままに踏ん返り返っていた。

…うるさい。自分の事位は簡単に出来る。

なのになぜこんなに周りの者はうるさいのだろうか。

なぜ　こんなにも周りに干渉したがるのだろうか。

『ゴテッ』

急にまぬけすぎる音が、天窓から響いた。

おかしい……。外から物音がするなんて。

完璧とまで言われた防犯設備が故障でもしたのだろうか？

顔をしかめる。最近の癖となっていた。そのせいで額に少し、皺の痕が残っている。

………少しくらいならいいかな？

ほら、だってさ、故障してたら家来とかに言わなきゃなんないしっ。

今まで感じた事の無い感情。

自分自身に色々と言いつけるときながら、好奇心と言つ名のやっかいな感情を露にする。

『ドサッ』

「いつつう。ったくよお。」

目を見開く。ギョツとして背後を振り向く。

「あ。お邪魔します。俺の名前は瞳 ヒトミ。どおもどおも」

迷子

「ちょ、ちょっと、待って。話を整理するから。」

「どうぞお」

「まず、お前は……」

「ストoupper！俺、お前じゃないのぉ！瞳っていう名前ついてるの」。

「……まず、瞳は、ええつと。女忍なんだっけ……？」

「うんっ」

「っありえない。」

「うんってアレ？何でありえないのぉ？」

目の前でニコニコとしている少女を、私はまじまじと見つめた。身長は平均的な私よりも十センチ弱低いが、なんとなく同い年だろうという事は分かった。

黒に近い青の服を着ており、それよりも真っ黒な髪の毛が肩よりも短い位置で跳ねている。

寝癖なのか天辺の髪一房がピンと立っているのがどうしようもなく気になる。

日に焼けた健康そうな頬に、よく見ないと分からない位の小さなほくろが左に一つ。

緩やかなカーブを描いている輪郭。大きくて黒目勝ちな奥二重の目に、影が出来るほど長いまつげ。特徴のない鼻、小さめの唇。

「オレ、そんなに見つめられると照れちゃうなぁ」

私はふとそこで、疑問を感じた。

……痛みを感じないのだろうか？

今の、私の時代……。少なくとも日本に生きている人類全てにおいて、『安全』の保障がついている。

小さな子供には小さな傷一つ無いし、大人でさえ皆瘡蓋や傷の無い綺麗な手足をしている。

そんなもんだから、良い年した大人が少しでも傷を作ると大体は泣くかパニック状態におちいる。

なのに……この少女、瞳は……。

うんと高い天井についている天窓から落ち、思い切り体を打ちつけたようだが痛そうな表情は一切見せなかった。

「あのおー 飛鳥ちゅわぁん」

「え？あ、なによつ。」

話しかけられるのを恐れていたかのように体が反応する。

「話し整理できたあ？」

「えつ。つとそうだった。まずお前は、」

「ひ・と・みい」

「っ。瞳は女忍。信じてないけどっ。で、ある宝を探していて……。リーダーに危険な旅になるだろうから、一緒に仲間を探そうと……。」

「そうそう。一緒にね。」

「しかし、方向音痴な瞳は……。」

「うわ、失礼だなあ。」

「女忍仲間と逸れてしまった。つまり、迷子。」

「うわあー何コレ。フカフカっ」

「そんで……って瞳っ！勝手に人のベット乗ってんじゃねえよっ！」

「……………ZZZZZZZZ」

「しかも寝るなよっ！」

「飛鳥嬢、何かございましたか……？」

背後の扉から声。人間ではない、ロボットの冷たい声。

「何もないっ！」

言った方が良いだろうか？一瞬そんな思いが胸をよぎる。しかし、考えてる間も無く、咄嗟に応えていた。

「はぁ……………」

大きな溜息。ドレスなのにも構わず、その場であぐらをかく。

「お前！じゃなかった。瞳！起きろっ！」

「ん〜。おじゃ〜ら〜」

微かに唇が歪む。噴出しそうになるのを堪え、怒鳴る。

「おじゃ〜ら〜 つじゃねえよっ！」

「はぁ…？ん。あ、そうそう！」

急に真剣な顔になると、瞳は飛鳥の目を捉える。

「飛鳥。おぬしを女忍メンバー、『呪われしき宝石頂戴グルー
プ』に任命する。」

声色を年取った老人のように変え、瞳が話す。私はその事に呆氣を取られ、内容は理解できなかった。

「つて事でよろしゅう。俺まだ眠いんだあ。」

やっと正常に脳が動き出した。……………ん？え？は？

「？ん？私、女忍。メンバー……………？任命？呪われた、宝石い？はっ？嘘！」

やっと、やっとの事で理解した私は思わず叫ぶ。

「ぎよええええ……………」

「ん？なあに、起こさないでよあ。」

「嫌。無理。断固拒否。」

「決定した事はあ。変えられないのあ。」

「決定許可なんてした覚えねえっ！大体ね！瞳！よあしく聞いて。」
「聞いてるって。」

「私は宝魚島のお嬢。生まれたときからお嬢様になるための教育を受けてきたっ。」

まくしたてる。相手に隙を与えてはならない。少しでも口調を緩めたら簡単に入り込まれる。

「それにねえ、小さい頃から顔だって可愛い、頭も良い。

もう、完璧にお嬢様ねっ。といわれ続け育ってきた。

外の世界に関心を持つことなく、この、この狭い城の中で全てを学んで生きてきた。

瞳、分かった？私はこの城でこれからも生き続けるの。

そんな冗談もう、付き合ってらんない。早く家に帰って！

良い加減にしないと、家来よぶから。」

どうにか噛まずに言えた……。もう十分だろう。このおかしな少女、瞳は帰るはず。

変な冗談はこれで終わり。ただでさえ疲れている体に更に疲労が溜まる。

「家来い？呼べばあ？」

……何を言っているんだろう？

瞳は、自分が発した言葉の意味を分かって言っているのだろうか？

「家来の百匹や二百匹、どおってことないさあ」
異常な頭痛がする。

「だってさあ 楽勝だもん 自信あるしい」

ニヤリと笑う瞳を見て、私は背筋に寒気がした。

きつと風邪を引いたから……なんて単純な理由ではないだろう。

『異常事態発生。ただちに対応せよ。異常事態……』

耳に鳴り響くブザー。私は自分で無意識に押していた事に気づいた。右手の人差し指が、微かに震えている。

「あちゃあ。本当に呼んだのかよ。ま、いつか。」

「……………」

「いくよおーいつせいのお」

「？」

「せえっ！」

「飛鳥嬢様っ！」

扉から現れた大量の家来とロボット。

それらをかけ離すように瞳は私を軽々と抱え、頑丈な窓を突き破り、外に飛び出した。

私は、こんな有り得なさすぎる出来事に対応できるような体じゃなかった。

全体重を瞳に預け、初めて失神を体験する事となった。

独り言（前書き）

今度は瞳の視点から

独り言

よしよし。俺の仕事はこれで完了。口元を緩めて、息を吐く。
「飛鳥、空飛ぶ位で気絶するなよなあ。」

気絶している為、遠慮なく顔を眺める。

確かに周りに可愛いと言われていた顔ではあるだろう。

小顔に、ぱっちりな二重。

少し目尻が上がり気味な所が、お嬢っぽい雰囲気をかもし出していた。

冷笑が似合いそうな口元。なぜか紅にそまつた鼻。

「てかこんなに白い肌。ありえねえええ。」

飛鳥の雪みたく白い肌。うう 羨ましいぜつ。

俺なんて、陽に焼けて真っ黒くなっちゃったよ。

くそっ、飛鳥も絶対色黒女にしてやる。うっしし

それにしてもこいつ。本気でやっていけるんだろうか？

忍者は相当な体力を催す。弱いものから堕ちてゆく世界。

たぶん我が儘放題に生きてきただろう体には無茶ではないか？

ま、今頃考えても遅いや。

でもなあ。体付きが標準よりは細い。きっと骨が細いんだろう。骨が細いと傷を負った際、折れやすいしあんまり得はない。

「そっぴいあゝ楓も骨細いよなあ。」

最近独り言が多い。いかんいかんっ！

確か独り言が多いと、将来円形脱毛症になるという恐ろしき事を聞

いた。んー、でも何故こんな独り言が増えたのか？

「あ、分かった。仲間と逸れちまったからだな」
うん。きつとそうだろう

自分の服の胸ポケットを確認する。

やはりそこには仲間共通通信機は無かった。嗚呼！不覚だ……。まさか落とすとは思わなかった。

楓と海実にあれ程『胸についているポケットに入れてると落とすから、他の場所にいれる。』

と注意されたのにも拘らず、面倒臭いという理由からそのままにしていた自分への罰だろう。

ふう。つまんねえや。早く飛鳥起きねえかな。

文句ばっか言われっけど独り言よりはましだろう。

笑顔（前書き）

また『飛鳥』の視点に戻りまあす

笑顔

「ぎゃあ！」

目が覚めて、真っ先に飛び込んだおかしな少女と、果てしなく広がっている木々の量に驚き、声を上げる。

「人の顔見て、ぎゃあ！とは何だよぉ」

不気味な笑いを浮かべた少女を見るうち、記憶が段々と戻ってくる。うげ、思い出したいくない事まで思い出してきた。

「瞳。俺様は瞳。君は女忍者の飛鳥」

完全に意識と記憶が戻った。

「私は…女忍者じゃな〜いつ！」

瞳を睨みつけ、キツパリと宣言する。

勝手に決められるのは好きじゃない。 まあ、好きな人なんて居ないだろうけど。

「あんさぁ〜…腹減ってない？」

えくぼをちらつかせ、瞳が問う。先ほど見た笑顔とは又違った笑みだった。

私は、へなへなと力が抜ける。

何を考えている？全く相手が読めない。

「ここら辺にさぁ、超美味しい果物があるんだよぉ 行こっつ行こっつ！ね？」

「…………どこにあるの？」

他の言葉を投げつけようとするが、急に襲ってきた空腹には耐えられない。

それに面倒な会話ばかりはしてられないと判断した私は瞳のペースにのる。

「こっちこっちい〜」

連られるがままに後を追う。瞳はこっけいなステップを踏んで森を

探索していた。

「着いたよおん。」

顎を上へと向けると。赤く、小さな実が木に沢山生っていた。一体どんな味を楽しめるのだろうか。

「すごい……。」

これが自然なのか。自宅の庭に生えている木とはまるで違う。とても優雅で、伸び伸びと育っている。

とにかく美しいのだ。声を漏らさないではいられないほどの華麗さを感じる。

「今日はいつにも増して綺麗　つか、旨そお。」

「美味しいの？」

毒はないのか？と心配もある反面、すごく食べてみたいと思った。

「口、開けて。」

「……………」

「いいからっ」

あっと思う間も無く、口には果物が入っていた。

ゆつくりと小さい物を味わうと、今までに無かった食感が口いっぱいに広がる。

甘い、甘い果汁。後に残るさわやかな酸っぱさ。種は無く、皮ごと味わえるらしい。

「どうつすか？超美味しいっしょ？」

「　うん。」

素直に頷く。本当に美味しかったのだ。

「もつと食ええ」

するすると信じられないスピードで瞳は木に登る。元祖はサルなのか？と思わせる位早い。

そして一番高い枝に座ると、ポイポイと実を投げてきた。

それを受け止め、口に放り込むと笑った。私が笑ったのだ。

心の底から大声で笑っていた。邪魔な家来に怒るのではなく、儀式等の際に無理矢理作る微笑みとは全然違った。冷笑でもなく、額に皺を寄せる事なく、自然と笑っていた。

「痛っ！」

『ドサッ』

「え？何？」

足元に瞳が落ちていた。打ちつけた腰を摩りながら、ぷうと頬を膨らましていた。

「げっ。」

「え？何？どうして落ちたの？」

私は屈みこむと、瞳の膨らんだ頬を突付く。

「んー。楓だあ。」

楓？耳に馴染まない響き。

「馬鹿っ！」

大きな森に轟く大きな声がした。

呪われしき宝石頂戴グループ

「かああええでええ」。久しぶりに会えたのに、そんな手荒い再か

「うっせえっ！」

全く理解が出来ない状況。

「『呪われしき宝石頂戴グループ』隊長、楓 カエデ。楓って呼ぶ。」

「同じく、隊員、海実 ウミ。そのまんま呼んでもらえれば結構。」

「ええっと 私は 沙理 サリ です。」

『バツ』という音と共に現れたのは、忍者服とでもいうのだろうか？ 瞳と似たような服を着た二人と、所々破れながらも美しいドレスを着た、一人の華奢な少女だった。

ここは私が住んでいた所と同じ世界か？

「おいっ！ 瞳っ！ てんめえはよ！ 一人行動はうちが許してから行えって何度いったらわかんだよ！

しかも通信機どっかに落としゃがって 馬鹿！」

「え？ 俺一人行動したっけ？」

「は？ お前は記憶までなくしたのかっ！ 低脳野郎っ！」

目の前で繰り広げられる信じがたい光景。 だって 忍者と忍者
が ?

「あのお。。」

私が頭を抱えて考えていると、ドレスを着た少女が話しかけてきた。
確か名を沙理と言った。

「え?何?」

「あなたも そう なんですか ?」

「何が?」

「女忍者の仲間と、なっってしまったのです……か?」
仲間?

「違う。女忍者なんかじゃ、ない。私は、戻るの。」

「どこへ……です?」

「そりゃあ、もちろん元のとこ……」

言いかけていた言葉が止まる。

元の場所?あの城の事か?躊躇っている。間違えなく戸惑っている。
だから、最後まで言えなかった。元の城に帰ると一言が言えな
かった。

本当に戻りたいのかと、問う。

分らない……。

しかし、自分がさほど戻りたいと願ってはいないことは確かだ。

感情がない沢山ロボットと、表情が全く分からない仮面を被った家
来。

外の世界を覗くこともなければ、歩きたいという事も思ったことが
なかった。

儀式等になるとストレスや苛々は倍に積み重なってゆく。それに比
べ、今は……

「自由?楽しい、なの、かな。」

「えっ、あつ、の、何がです？」

「つつかさ、あなたも仲間に入れられた訳？」

「はい。」

「どんな風に？」

「……私は、小さな小さな島の、姫として教育を受けました。」
やはりドレスを着ているからには、どこかの島の姫らしい。

話し始めた少女に、目を凝らす。十三才位だろうか？私よりも一つか二つ歳が小さそうだ。

顔も、どこかあどけない。小顔に、小さな目、鼻、口。

腰の終わりの所まである、長く、かすかに茶色が混じっている細い髪。

「ところが、いつものように庭に水を撒いている時に……」

「さらわれたの？」

少し押し黙ってしまった沙理がじれったく感じ、先を促す。

「はい。急に頭に思い衝撃がきて、気を失ってしまったんです。

気が付いて目を開けると、知らない人が目の前に立っていたんです。後に、海実さんと分かったんですけど。」

ちらりと横目で海実を見る。瞳よりも短い髪の毛。

図体は相当大きい。しかし、脂肪なんて物は一切無いだろう。

盛り上がった筋肉と、太い骨。

顔は、とても印象に強く残るものがあつた。

左目のまぶたから、口元までにも及ぶ痛々しく、とても長い傷跡。

その姿は、誰もが男と間違える程の迫力さえあつた。だって、私も女忍者グループの中の一人と聞いていなければ、絶対間違えていただろう。

「……やっぱり、あの、最初はすごく、すごく恐かったです。」

両親を思ったりすると涙が止まらなかったり。」

両親……。私に両親という存在はいなかった。言葉の意味は知っている。

どうやら、両親という存在は、私を生み出したものだという。

もちろん会ったこともないし、興味も無い。

生まれた時からお世話なら家来達がしていたし、今の私にとって必要はないものだろうと思っていた。

「でも…今は海実さんはとても優しいです。

リーダーの楓さんも、口は悪いかもしれませんが、とっても良い人です。

私がこんな偉そうな事いえませんけど。」

目を線になるまで細め、照れくさそうに笑う沙理。

私にはとうてい出来ない笑い方だった。

「あんたは…」

「あつ、あの。」

「ん？何？」

「さ・りです。」

質問を投げかけようとした私に訂正を求める沙理。

私は自然と笑みが零れる。言い方が、誰かさんにそっくりだったからだ。

「沙理は、今、楽しい？」

少し悩んだ後、ふんわりと笑って沙理は答えた。

「楽しいです。」

質問（前書き）

又もや瞳視点でいきます

質問

「あの女、何だ？」

予想していた質問を問われる。

「宝魚島のお嬢様っ」

真顔で、声を弾ませおどける。

「何故ここに？」

「人数足りないから増やそうって計画したの楓…だろ？」

「……あいつ、口うるさくないか？」

あまりにも的確な事を聞くなよお。うつ…。正直な事を言うかどうかどうか迷う。

「今の時点ではなあんも。」

中途半端な答え。でも、楓はこれ以上追求しなかった。

「ふうん。飛鳥…ね。」

もう興味がなくなったのか、武器の点検をし始める。

ちよ、待てえ！俺だつて聞きたい事はあるさ

「あの子は？」

小柄な、飛鳥と話している少女を指差す。沙理と本人は名乗っていった。

「小さな島の姫。年は十三。」

一つ年下つて訳か。

「なぜメンバーに選んだか。それは海実に聞け。」

「ほおい。」

面倒な事、俺嫌いだから聞かないようだっ

海実が選んだんなら俺は文句無しっ。

これ以上聞く事はないと思い、んゝと体を伸ばす。

知らぬ間に強張っていた筋肉が解れ、心地よい。

「ねえゝ。楓。」

「あ？」

「いつ出発予定？」

「明後日の夕方頃。予定はね。」

今日と明日はここで泊まるようだ。

やったぜい！果物あるし、この木、頑丈だし。良い場所じゃん

「楓え、俺もう寝るねえ。」

「駄目。」

「えっ？いいじゃなゝい。本気で眠い…。」

「一生寝てろ。」

「じゃあ、又明日ね。うふっ。おやすみ」

愛情たつぷりの投げキッスを送り、蹴り飛ばされる前に場所を移動する。

明後日の為にも、今日からたつぷり寝ておこうつと。

質問（後書き）

次は飛鳥視点に戻ります

作戦勝ち

沙理と話しながら寝てしまい、夜を明かしたらしい。
起きると、明るい光が目飛び込む。

「あ、飛鳥さん…ですよね。おはようございます。」

こちらも起きたばかりなのか、声が少し枯れている沙理に微笑みかけられる。

「ん。沙理。おはよお……。」

「なんかまだ眠いです。私達あのまま話しながらずっと寝てたのに。」

「そおだね、私もまだ眠いよ。」

お互いぼやっとしている頭を押さえる。

他の人達は起きているのか？と周りを見渡すと…

「今起きたのか？水あびして、飯食え。」

低く、腹に響く声で一人の男…いや、海実が近づいてきた。

「あ、海実さん。おはようございます、」

「ん、おはよ。」

嬉しそうな顔で挨拶する沙理。

これが男と女の関係だったら、ずいぶん微笑ましい光景だろう。

「ええつつと…瞳…何してますか…？」

頭の中でピースしている瞳が現れる。

慌てて脳内消しゴムで消したが、どこへ行ったか位は聞きたい。

「あ？瞳？あいつはまだ寝てんぞ。三日位眠り続けるかもな。」

「いや、あいつなら五日間はねてられるだろ。」

木の陰から現れた長身の少女。きつとリーダーの楓だろう。

こんがりと焼けた、長い美脚だけで相当スタイルが良い事が分かる。

木の陰から外れ、露になった顔の方へ視線をずらす。

髪は私より少し長く、邪魔臭いのか後ろで束ねている。

鋭そうな目に整った顔のパーツが加わる。確かに、リーダっぽい顔立ちをしているとは思う。

「ん？何？何かうちの顔についてる？」

じろじろと見た私を不審に思ったのか、乱暴に顔をぬぐう楓。

その姿が、小さな子供のように可愛かったので、思わず笑ってしま
う。

「なんだよ？」

「なんでもないっ。じゃ、瞳起こしに挑戦してくる」

まだ口元に笑みを浮かべたまま、瞳が寝ているらしい木に向かう。
どうやって起こそうかな…？

「○ × * # x 。」

瞳が寝ているらしき木に近づけば近付く程、変挺で、不気味な音が
聞こえる。

「 * … 」

もしかして…と想像したことを頭を振って否定する。まさか…ね？

「瞳っ！」

変な音が一番良く聞こえる場所で怒鳴る。

ついでに、瞳が寝所として使っている木の根元を蹴飛ばす。

『トサッ』

つい昨日聞いた音が目の前で響く。

「もしや…」と思い木の裏側を覗くと、頭を抱えながらもすっかり寝ている瞳が落ちていた。

「」

やはりさっきの不気味の音は、瞳の口から飛び出てきたらしい。

それにしても木から落ちても寝ていられる人間って存在するんだなあ…。

「瞳っ！起きろっ！」

「とぴつくすうぽあ…」

「何語はなしてんだよっ！起きろよっ！」

「らすとないと、いとういず、みい…」

「いつとけど、英語ってそんな発音じゃないからねっ。」

勝手に言葉つくらないのっ！起きろっ！」

あまりにもくだらない会話を繰り返すのは面倒なので、思い切って頬を叩く。

『ベチベチベチベチッ！』

見る見るうちに瞳の頬が膨らんでいくが、気にしてられない。

しかし、何度やっても起きないので作戦を変える事にした。

「瞳っ！起きなかったら、あの、美味しい赤い果物全部食べてやるからっ。」

「ん？」

「いいもん。全部食ってやるからねっ！」

「ん…。いやあ、いい朝だね。こんな日には赤い美味しい果物がぴったりだあ」

腫れ上がった頬を押さえ、ニコニコと起きる瞳。

「え？飛鳥も一緒に行きたい？仕方ないなあ、一緒にいこつかあ」
呆れて何も言えなくなつた私の手を引いて、るんるんと歩く瞳。
文句を言いかけた口を今回は閉じる。

「うわっ！」

「あの瞳が起きてるよ…。」

本当に驚いた顔をした海実と楓を尻目に、果物を食べに向かう。

「はい！これ、やるっ」

昨日と同じ様にするすると木に登ると、沢山の果物を抱え降りてきた瞳は、両手いっぱい果物を私に向かって差し出す。

「美味しいっ。」

「なっ」

二人でふざけ合いながら食べていると、楓の集合がかかる。

「あいよあ」

「今行く。」

お互いに顔を見合わせ、同時に走り出す。

笑いの余韻が残ったまま、集合がかかった場所へと向かった。

忍者服

「明日出発しようと思う。」

いきなり本題に入る楓。

「その前に、やってほしい事がある。まず、海実。自服の修正と武器の点検。」

「終わった。」

「よし。次に瞳。武器の点検 やった？」

「これからやりまっす」

「忘れんなよつ。で、飛鳥。新しい服に着替えるのと、武器を選んでもらう。」

これは沙理も同じだな。後でうちが説明する。

他には 飛鳥は瞳、沙理は海実に武器の使いかた等を教えてもらえ。

うちは服を渡した後、新しい通信機を作る。今日中になんとか人数分は作れると思う。

以上！質問は？」

「……。」

「おっけ。無いって事だな。じゃあ、今言われた事を全員全てこなしてから明日出発。」

「分かった。」

説明をしてくれるというので、早速楓に近寄る。

ちよつと来て、と言われ他の場所に移動すると、服を渡された。

「うわっ！すごいっ！」

忍者服というのは一人一人少しでも違いうらしく、同じ服は二つ無いと言う。

確かに全員を見ていたが、同じだった服はなかった。

私の服は、柔らかな生地で作られており、少し濃い黄色や、オレンジ色をしている。

浴衣をイメージして作られているのか、腰には大きな帯びがついている。

両肩を一部出すような格好だった。

短いスカートにはスリットは無く、中にズボンを着用するという格好だ。

すぐく気に入った私は、早速ドレスを脱ぎ着替える。

この先必要ないドレスは、楓のアイディアで木に括り付けておいた。

一方沙理の忍者服は、大人しそうな性格からして作られたのか、腕の裾とスリットの付いたスカートの丈がとても長い。

色は淡いピンクで、とても綺麗だった。

前には釦、腰には朱色の蝶々模様の紐で結えてあるのが、衣装の綺麗さを増す。

楓はどんな服だろう？と興味深く眺めると、全体的にシンプルで、黒の紐が腰に結えてある。

その紐に掛てあるのは何だと聞くと鞭だと答えてくれた。楓の武器の中の一つらしい。

七分丈のひらひらした裾に、スリットの下に履いている黒いスパッツが見え隠れする。

他の瞳と海実の服も気になるから、後でチェックしようと思いつつ、新しい靴までも履く。

この靴はサイズが違っただけで、デザインは皆、同じらしい。

とても軽く、走りやすいしサイズも丁度だった。

「楓、ありがとう。」

初めて見た楓の笑顔は、とても幼げで温かった。

武器

「じゃ、次に武器：。」

忍者服を着用後、楓から武器の説明も教わる。

「うちの武器は見ての通りの鞭と、手裏剣とクナイは大体操れる。他にもやろうとすればできる武器がある。タイプは：どちらかというと遠距離ってところ。」

瞳は特別製手袋を装着した上での格闘。至近距離での戦いなら瞳が一番有利かな。

他にも飛び道具は使えるさ。

海実は裾に入っている棒：あ、もちろんただの棒じゃねえよ。で、それを使って戦う。

威力は半端ねえ。当たたら脳天砕ける。

んで、力勝負を自慢としているから、飛び道具は一切使わないそうだ。

さて：飛鳥と沙理はどんな武器使うんだ？」

急に聞かれても困ると思いつつ、考える。

「あの、私、なるべく遠距離の武器を使いたいです、けど：。」
近距離戦は怖いのだろうか、沙理が遠慮しながらも聞いた。

「んー。じゃ、沙理は弓使う？それと医療もやってくれたら助かる。」

「はい、やります。弓も医療も頑張ります。」

医療を任せられたのが嬉しいのだろうか、必死に閉じている口元からは、今にも笑みが零れそうだった。

これで沙理は決定つと…。私はどうしようか…。

「飛鳥、まだ決まらない？」

じゃ、何の武器を使えば良いか言うから、その中からでも使えたいの選んでくれ。」

「分かった。」

「球や剣。斧、紐、を使った攻撃、かな。他にはー ん…思いつかねえや。」

「鉄砲とか使えばいいじゃん。」

「それは駄目だ。」

思いつきで発した言葉に、楓が厳しい顔できっぱりと言う。

「何で？」

「昔から忍者は使つてよい武器が規則で限られていた。

今は随分と優しくなつて、飛び道具や特殊物を使つてでの攻撃は許されているが、鉄砲だけは使つてはいけない。」

「破つたら？」

「破る？そんな奴いない。忍者は皆、死に際の時でさえも、規則を守る。」

忍者としての誇りを持ち続けているからな。」

変なの。忍者つてそうゆう昔からの規則が決まっているなんて知らなかった。

私にしてみれば、くだらないの一言。

誇り？…はあ？何の為の？そんな規則に縛られるなんて面倒臭い。大体そんな規則を破つた忍者は本当に一人もいないのだろうか？

「ま、とにかく鉄砲は駄目だ。」

分かりたくないが、表面上頷く。さて、何の武器を担当するか…

「ねえ楓。私、じゃあ、球使つよ。」

使い方なんて分からない。でも、一番興味があつた。一体どんな使

い方をするのか。

球なんて武器にならないんじゃないかという疑問もある。

「球を選んだか。分かった。おい！瞳っ！」

「はへ？」

間抜け面をして瞳が現れる。

私はにやりと笑い、服に注目して瞳を睨むようにして見る。

全体的に紺色で、スカートは膝が隠れるかどうかの長さだ。

スリットが入っている？と思いきや、どうやら端が太ももにかけて破れたらしい。

青色の短パンが破れた所からはつきりと見える。

フードが付いていて、腰を巻いているのは何重にもした、青く、細い紐だった。

硬結びをして余った何重もの紐を馬のしっぽみたいに後ろに垂らしている。

袖は腕の半分までない。胸のポケットには、特殊製手袋？らしきものがちらほらと見えた。

「飛鳥の武器は今日から球を使う。瞳、お前は指導せよ。」

「りよぉ〜かい。」

「任せた。飛鳥がどう成長するかは瞳次第って事だから。」

「荷が重いな。」

「うちはこれから自分の仕事をするから。じゃ。」

「あいよ。」

瞳がニツと口で笑って私を見る。

「忍者服、可愛いじゃん。前よりか似合ってるぜい。」

こんなにストリートに褒めてもらった事が無い私は、返す言葉が見つからず、足元の土を蹴飛ばす。

「飛鳥。球って意外につつか、見たまんま難しいよお。ガンバレ！」

「そんな難しい？」

「ん、まあねん」

私は選択を間違ったか？いまさら変えたいと言ったらどんな反応するだろう？

「さて、こつちで練習しましよぉ、飛鳥ちあやん。」

「…ちゃん付けすんなよ…。」

いいから、いいからっ。と腕を引かれる。その力が意外に強くて、私は驚いた。

修行〔1〕

「ここでやるつか。まず、球には色々種類があつてさあ……」

一言も漏らさぬように説明を聞いた後、実際に投げる事になった。投げるのは、必ず手元に戻ってくるという優れものを瞳からもらった。

サイズは変えられるらしいので、右手に合わせて変形させる。

「投げてみてえ。」

瞳の声に合わせて、球を投げる。

何これ？重すぎない？

最初は見た目よりも重い球に躊躇い、せいぜい五メートルも飛ばなかった。

しかし何度もうるさい注意を受けたせいか、昼下がりにもなると十メートルは裕に飛ぶようになった。

「おお！覚え早いねえ。」

球を投げるのがこんなに大変だと思わなかった私は、答える間もなく荒い呼吸を整える。

「そろそろ昼飯食つか。」

「……う、ん。」

「で、休憩したら又特訓だなあ。」

「ん、そだね。」

肩を並べて先ほど集まった場所へ行くと、楓が何かの作業中だった。邪魔をしないようにそっと二人でそらの切り株にしゃがみ、どうでも良い話ばかりをしていると、沙理と海実も同じく肩を並べて来た。

「あ、あ、飛鳥、さん。」

「特訓どう？」

「あの、弓って、こんなに、疲れるんですね。」

まだ胸が上下に動いている事から、相当キツイ特訓を受けたのだろうか。

「キツかったの？」

「いえ。たぶん、キツイというより、私が体力ないみたいです。」

「いや、沙理。お前なかなか弓むいてるぞ。もっと動けなくなるかと思ってた。」

地に響く低音。海実が沙理を褒める。

私は、気になっていた海実の服ももちろんチェックする。

このメンバーの中で一番動きやすい格好だった。

夜になると闇と区別がなくなる色。楓よりもシンプルな服だ。袖は無い。きつと邪魔だから切ったのだろう。ギザギザに切れている袖を見て推測する。

膝までない短いズボンに、恐らく何かの道具が入っている袋が二つぶら下がっている。

腰にまいているのは空手等の胴着に使う、黒い帯だった。

「あ。飯くうか。」

たった今私達に気づいたような顔で楓がこちらを向く。

一体どれ程集中していたのだろうか？

「仕度するから、そこで待ってる。」

昼飯ってこんなに恋しいものだったけな？

昼御飯

「ねえ、食料ってあるの？」

ふと心に浮かんだ疑問だった。それに答えてくれたのは、海実だった。

「森は食料の倉庫。調味料などは薬草とか混ぜて使えるし、鍋等は持ち運びしている。」

ふうーん。そうだったのか。森は…食料の倉庫…ね。

「私、楓さん、の事、手伝ってきます。」

沙理は小声で言うと、小走りで楓の元と向かった。

私も行こうかと数分迷っていると、沙理と楓が巨大な鍋二つを抱えてもってきた。

その鍋の持ち方から、まだ火は通していないという事が分かった。

「お。何作ったん？」

「栗ご飯です。」

「汁物」

「火、焚かしといた。」

「ありがとうございます。ここに、鍋、乗せますね。」

私がまだ一言も喋っていない内に、ご飯も汁物も火を通し出来上がり、良い匂いが辺りにたちこめる。

「良い匂い」 旨そう」

中を覗くと二十人前はあるだろう、もの凄い量だった。

一つ目の鍋は大粒の栗と、ホカホカ白米が合わさったご飯。

二つ目の鍋の汁物は、体に良さそうな具がたっぷり入っており、どちらも食欲をそそる。

海実が作ったという木の器と、竹の箸を器用に使い昼飯を頂く。

「うんめえ」

「美味しい！」

「腹減つてた事、今気づいた。」

「あ、ち、ちょ！溢すなよ！俺の分だぞ。」

「うつせえな。とつとと食え。」

和気藹々と皆で鍋を減らしてゆく。

一番最初にご馳走様と言ったのは、意外にも海実だった。

「え？もう終わり？まだ残ってるのに……。」

「私も、ご馳走様でした。」

海実に続き、目を一步線までにも細めて満足気に沙理が言う。

私もふうくと唸り、箸を置く。

手を合わせ、まだ残っている二つの鍋に目を通すと、あと半分以上は残っていた。

「これ、明日の分も余分に作ったの？」

「んな訳ない。こいつら二人、大食いだから全部食い尽くすよ。」

有り得ない。こんな大量な分を二人で……。

瞳はあともう少しいけそうだけど、あのスタイルの楓まで大食いなのか……。

「今日こそ勝負だっ！楓にやあゝまけねえ。」

「ふんつ。瞳に負けたら恥だねっ。」

鍋を挟んで睨み合う二人。……きっと毎回勝負しているんだろう。

どうせ全部は完食できないだろうと思い、沙理と話していると

「んん！ちょ！最後の一口の栗ご飯はもらったあああ！」

「はあ？じゃあ最後の分の汁ももらったから。」

「駄目え！全部最後は俺が食うのだあ！」

「遅い！汁は完全にもらった。」

……は？へ？完食ですかい？

「ふう〜。いいもん 最後のご飯はもらったもんねえ。ご馳走さん
つ。」

「今日も引き分けかよー。だりい。ご馳走さん。」
嘘でしょう、と鍋を再び覗くと、二つの鍋がどちらとも綺麗に輝いていた。

あ、ありえん。

「これ、洗って来る。」

「私も行きます。」

洗い物くらいしなくては、と腰を上げる。沙理も当然の様にしてついて来た。

「洗ってくれるの？有難う。」

土の上に大の字に広がっている瞳。

なんだか妙にいじりなくなった私は、足元に落ちている石をなるべく当らないように投げた。

しかし今日の特訓を受けたせい、投げた石は瞳の顔めがけてカーブを描く。

「危ないっ。」

自分で投げといて目を瞑る。

さすがにやばかったと肩を縮めて目をそっと開くと、瞳がいなかった。

さつき寝ていた場所には。

「危ないって、飛鳥が投げたんじゃないかあ…。」

眠そうな声が真後ろから聞こえ、驚きつつも後ろを向くと、眼を擦っている瞳が立っていた。

全く、気付かなかった。石を避けた事も。後ろにいた事も…。この能天気さのどこにそんな能力があるのだろうか。一体どれ程の修行をつみ、努力をしてきたのだろうか。

私には、まだ、全く分からない事だらけ。

でも、たった今、近づきたいと思った。今までにない感覚が湧き上がってくる。

近づきたい。少しでも追いつきたい。自分の武器を使いこなしたい。

自分の欲望の塊。

それが身体に行渡り、感情や行動となって表れる。

「瞳つ、私、洗物したら修行するからっ。」

「分かった。んじゃ、しゃあないから起きておくよ。」

「沙理、さっきの場所でもいいな？」

「はい。」

沙理も修行を早くやりたいのか、自然とお互いに駆け足になっていた。

洗い物を丁寧ながら、素早く終わると、私は瞳の元へと走った。沙理も、それでは。と言うと、海実の元へと駆けて行った。

「おお、来たな 修行はじめよっかあ。」

「うん。」

案の定、木の上にいた瞳。すごく高くて、丈夫な木だ。

これならあと十人は余裕でいけるな。

「きゃ―――――っ！」

耳が痛くなる程の悲鳴。……きっと、沙理だ。

戦い〔1〕

「あ、やべっ、敵か？」

咄嗟の事に驚いて固まった私に対し、瞳は音も無く木から飛び降りると私の手を引いた。

「行くよっ」

「え？あ、うん。」

完璧に戸惑っている私。手を引かれるがままに走る。

「あ、ちょ、ストップ。」

息が切れそうになった頃、急に止まれと命じられる。

言われるがままに止まると、そこは先程洗い物をした、すぐ傍の場所だった。

「敵は七人。楓はもう戦ってるな。お、あと五人つてどこか？」

目を凝らすと、楓が鞭で一人の男をふっ飛ばしているところだった。飛び道具も同時にこなしているのか、派手な金属音が耳に障る。

「ふう〜ん。楽勝つてどこか？飛鳥、いける？」

「え？は？敵と戦えって事？」

「大丈夫。俺が援助するし。」

「…分かった。」

不思議と高鳴っていた心臓は、冷静になっていた。

それどころか早く武器を試せるという感覚から、恐さは全く無かった。…私、狂人？

「いけっ。」

背中を思いがけない力で押される。

もうやけくそ状態で敵に向かっていく。

今日調整してもらったばかりの球を手に握ると、不覚にも笑みが浮かんでくる。

「ちっ、まだいたかつ。」

敵は男。すでに二人は意識がないようだ。

一人の若い男が私に気づき、舌打ちをする。

「お前、そんなボールで俺に勝てると思う？」

「あんたには勿体無いかもねっ」

挑発されたのが悔しくもあり、力任せに球を投げる。

球は狙い通りに飛んでいき、相手の右耳に命中する。

まさか本当に攻撃されるとは思ってなかったらしく、完全に戸惑っている。

「いてっ。くそっ！舐めんなっ。」

「負け犬は黙っとけ。」

今ので完璧にキレたのが、本気で向かってきた男。目で確認できない素早い動きで飛び道具を投げられ、固まってしまう。

やばい。

「うぐっ。」

刺されたらどれほど痛いかを考えていた私の目は、目の前で倒れていく男を捉えた。

誰が倒したか。そんなのは分かりきっている。

「瞳、ナイス、援助。」

「お、今のでやる気出たぜ。」

「瞳っ！ちょ！こっち頼む。」

声がした方を見ると、残っている四人の全てが沙理を囲んでいる。海実と楓は、攻撃したら沙理を容赦なく殺すといわれ、舌打ちと睨みをしたまま、武器を地面に置く。

「おい、そのガキ。お前も武器を捨てろ。」

「は？俺？」

「他に誰がいるのか。おおーっと、その隣にいる嬢ちゃんも武器、置いてもらおうか。」

なんで俺はガキで、飛鳥はお嬢様なんだよ…。

瞳のつぶやき。頬を膨らまして、飛び道具を地面に投げつけている。私も、捨てなくちゃ。じゃなければ、沙理が…。

「早くっ、俺は気が短いんだぜ？この女、殺すぞ？」

「この卑怯者。」

楓のアルト声。そんなの、卑怯だ。最低な事をすんじゃねえよ…。声にならない憎しみまでもがこちらに伝わってくる。

「本当だし。全く、落ちぶれたおっさん達だね。」

唇を尖らせた瞳の文句。

その後、小さな声でついでに俺はガキじゃないと付け加えようとするのが分かる。

しかし、それは言葉として口から出ることはなかった。

「無駄な話はやめろ。とりあえず、そっちの二人」

私と瞳を指差す。

「こちらに来い。抵抗したらこの女、殺す。」

ほんと、うつさい野郎だ…。瞳のわざとらしい溜息と共にでる愚痴。しかし、何故か余裕な、感情が浮かんでいない笑みを浮かべながら、瞳が前方を歩く。

私はその後についていくしかない。

……どうする？

武器の球は地面。とりにいつて攻撃するには距離がありすぎる。良い方法が思い浮かばず、唇をかみ締める。

何もできない。

無力だ。

嫌になるほど無力だ。

こんな卑怯な手をとられ、そいつらに逆らえもしない…。

己の弱さを突きつけられた気がする。

こんなにも抵抗できないとは、思ってもみなかった。

楓と海実と、四人組の男のいる場所までむかうと、そこで立っていると命じられる。

そのまま無言の時間がすぎ、いつの間にか倒れたはずの男が二人、仲間に支えられてきた。

その内の一人は先程私と罵声を浴びせ合い、瞳の一発殴りで地面に叩きつけられた男だった。

「生意気な奴等め。後でやばいことになるぜ?」

もう一人、気を失っていない方の男が顔を歪ませながらこちらを睨む。

「いや、お前の顔の方がやばいぜ?」

げらげらと瞳が笑う。同感だったので内心頷く。

馬鹿にされたと感じた男は、怒りを露にし、なぜか私を殴ろうと右手で大きく振り被る。

私は無意識に地面に転がると、大きなサイズの石を顔面めがけて投げつける。

「げほっ」

見事命中!

「ナイスっ!」

男が再び地面に倒れるのと、楓が素早く武器を拾い上げたのは全く同時だった。

それがまるで合図かのように海実と瞳が音も無く動く。

数分後。目の前に広がっていたのは男の体と血痕。そして、呼吸を整えた私達五人だった。

敵、仲間

「おま、飛鳥、見た目より全然使えるっ！おもしろいわぁ」

「良い運動になった。」

「あの、怪我まだ治ってないんですけど…。」

「武器拾ってくる。」

「ちよつと、こいつ等まとめんの手伝えよ。」

戦いが終わった後、地面に転がっている男達をロープで巻く。

何故かそんな面倒な事をするのか聞くと、宝石についての情報等を聞きだすそうだ。

「え？拷問ですか…？」

「そこまで手荒い事はしねえよ。ま、相手次第だけだよ。」

「まだ生きてるし…。」

「こいつ、リーダーっぽいね。」

「あ、飛鳥の初敵じゃなあい」

まだ息のある者、合計四人を全て一本の縄で締め上げ、無理にでも起こす。

私は血で濡れた服を見るのが躊躇われ、少し目を逸らす。

「ん…う。」

「ううう…。」

全員が目覚めると、早速楓が問う。

「おい、全て正直に答えろ。」

「……。」

「お前等は呪われしき宝石を狙っているものか。」

呪われた宝石。

今、捜し求めている物　らしい。

詳細は聞いていない。そのうち聞くんつもりだが、実は今まで忘れていた。

修行が落ち着いたらじつくり聞こう。そう、考えた。

「おう。」

少しの沈黙の後、そっぽを向きつつ答えたのは私が負け犬とけなしたあの男だった。

やはり、リーダーなんだろう。答え方にも威厳があった。

「んで、手に入れた情報、全て吐いてもらおうか。」

「情報？自分で探すんだな。」

「ああ？自分達の状況分かってんのか？」

迫力がある海実の声。本気で怖い。

相手はあまり怯んでいないが、もし私があの声で、あの目で凄まじいたら

いや、考えちゃいけない事だ、きっと。

私は海実が敵じゃなくて良かったと心から感じた瞬間だった。

「ああ、嫌になるくらい。小娘に仲間も一緒に縛られて、危ない状況 だろ？」

「あらん リーダー君よ、人の事小娘とか言ってるけど、実際俺等と大体歳変わんねえだろ。」

うぐつと息を呑む音。つまり間違っではないのだろう。

私よりも年上だが、海実と同じ年だろうと推測。

「おい、リーダーこう言ってるけどいいのか？」

お前等私達に殺されるかもよ？てか実際仲間三人いないし。」

しばし無言の時間が過ぎる。

「俺、全て話すから離してくださいっ！」

「俺もこんな所で死にたくねえよ……。」

気弱そうに俯き、喉から搾り出したような声で訴える二人。

「ふうん……。じゃ、海実。こいつ等、他の場所で、じっくり話聞いてやって。」

「おう。」

さつき沙理を人質にし、散々私達を馬鹿にした男が、震えながら海実に連行されていた。

あれが素なんだろうな。

あーあ。私、あんな奴に苦戦したのか。

そして、残った二人。脅しに怯まずに、立っている男。

その内の一人、リーダーと呼ばれる男は、鋭い目と、軽く開いた唇からは尖った歯。

鼻筋の通った顔を持ち合わせる。

首筋まである髪は、闇を溶かして染めあげたかのような漆黒。

荒い息と共に、うなじから血色の良い肌が見え隠れする。

なんか悔しいが、相当な美形をしている。

もう一人は短く刈り込んだ茶髪の男。

髪の毛に合わず、顔はあどけなく可愛い。

リーダーに比べると、筋肉の付き方や身長差が彼を貧弱に見せるが、私に比べると相当な力の差があるだろう。

「残っちゃったね、お二人さん」

土の上なのにも構わず胡坐を掻き、ニヤニヤと笑っている瞳。

「俺、情報漏らすわけにはいかねえ。」

「俺も。リーダーに従います。」

「素晴らしい友情だね。裏切り者の御二人とは違って。」

「うつせえよ。てか、お前！」

今まで一言も話してなかった私を指差す負け犬いや、リーダー。

「は？負け犬に話す事はねえよ。」

「俺、どうしたら負け犬卒業できる？」

沈黙。

「へ？」

「は？」

あまりにも切なげな表情で、明らかに拗ねている表所を見せる男。そうゆう仕草が全くもって似合って無いが、妙に艶色がある。

「負け犬って悔しいのかよ……」

沈黙を破った瞳がぷつと吹き出し、馬鹿にするような眼で男を見る。

「あの、怪我、大丈夫ですか？」

「……はい？えっと、俺？大丈夫だよ。別に。」

自分のリーダーの人格の代わりように、驚きすぎて声も出ない様子だった刈り上げ少年に同情を感じたのか、敵なのにも関わらず心配している沙理。

「俺、真面目に負け犬って嫌だな……」

おい！さっきまでの鋭い目はどこにやった？

「お前っ！」

「飛鳥。」

「え？飛鳥って言うの？」

「……」

無言で頷く。名前を教える必要は無いと思ったが、不思議と名乗っていた。

「飛鳥あゝ、俺さ……」

「いきなり呼び捨てかよ、」

「飛鳥！俺、お前に魅かれた！」

……先ほどより冷たく、長い沈黙。重い空気が背中に伝わる。

「何言つてんの？」

「……あら……。」

「まじかよ……。」

……何？この展開。有り得ない。信じられない。

悪夢？魔術？黒魔法？怨念？呪い？自業自得？

私、何かしました？

「今、決めた。俺、仲間になる。んで、負け犬卒業する。」

「無理。」

やっと声がでた。一生声がでないかと思ったから本気でほっとする。

「お願い！飛鳥っ！」

「呼び捨てにすんな。」

「頼むっ！」

「嫌。大体、私が決める事じゃないし。」

楓を横目で睨る。リーダーの楓。主権は彼女にある。

早く断ってほしい。早く目の前からこの男達が消えて欲しい……。

「仲間には出来ない。」

落ち着いたアルト声。いつもより遥かに安心感を与える。

「でも、情報を教えてくれるならば、しばらくは同行を許可する。」

……落ち着いたアルト声。いつもより遥かに不安を感じた。

修行〔2〕

未だ信じられない私に追い討ちをかけるかのように話は進んでいく。
…ええ、そうですよ。良い方向とは別の方へ。

「俺だって全部の情報を教える訳にはいかねえよ。
大体、情報っていつても高が知れてんぞ。」

「そこはお互い様だな。でも出来る限り情報を引き出す。」

「俺も。このまま殺されるよりかは、喜んで同意します。」

坊主男も沙理を熱っぽく見てから小声で言い切る。

「マジ？」

「おう。」

いまさら私なんかに拒否権はなかった。

私以外に反対する者が居なかったからだ。

「誓え。裏切らないと。」

「当たり前。」

リーダー同士で何かを呟き合う。邪魔はしたくないので、数歩下がる。

こんな事になるなんて、全く予想外だった。

生きてるってこうゆう事なんだろうか？

勝手な予想していたり、高を括って居ると、あっさり裏切られる。
あっけない程に自分の惨めさを知る。

「飛鳥。」

「ん、何？」

「お前、なんか変な奴に好かれたみたいだぜ。」

「認めたくないけどね。」

「つぶ。ま、これからさ。」

「なにがだしっ！」

リーダー同士の相談が終ったらしく、縛られていた男二人組の縄を外す。

「楓、こっち、情報聞くの終わった。」

「ご苦労、そいつら、逃がしていいけど、アレ誓わせとけ。」

「もう誓わした。んじゃ、離すよ。」

海実と話していた二人の男は、海実に頭を下げ、一瞬で逃げ去った。

「あいつ等、本当に仲間か？」

「……一応そのつもりだった。」

表面では冷静を保っているリーダー。が、仲間に裏切られたショックは小さくないだろう。

仲間と信じ、共に行動をしあい…それがあっさりと裏切られた事實は、深く心に傷を作るだろう。

「飛鳥あゝ 修行すつぞあゝ。」

「分かった。今行く。」

「俺も行く。」

「え？は？」

「いいから、いいから」

先程とは全く違う顔つきで、こちらの背中を押す男。

「あんた、何？」

「俺？名前かー、何だっけ？ん……、あ、思い出したわ。」

名前を忘れていた人を、初めて見た。しかも、こんな近距離でお目に繋れるとはねっ。

「俺の名前は、夜人。夜に人と書いて、ナイト。」

「名前だけはカッコイイんだ。」

「うっせえよ。」

「本当の事だろ。」

唐突に大声が木々に響く。

「早く、俺寝ちゃうよ？しかも、飛鳥、楓の毒舌うつってきてるって！」

「ああ？なんかうちの事いった？」

「いや、あの、はい！楓様のことは何も言っておりませぬデス！早く！修行しましょう、飛鳥ちゃん、夜人君。」

どうやらさっきの話、全て聞いていたようだ。

あんなに遠くにいるのに。

私の眼球では、見えるか見えないかどうかの距離にいるのに…。

「行くぞ、飛鳥。」

返事をする気にもなれず、早足で瞳の元へと急ぐ。

辿り着くと、瞳は自分の特殊手袋で一人修行を行っていた。

「瞳？」

「お、そおりい。んじゃ…やるか。」

隣をそつと見ると、何も言わず傍にある木と一対一になり、黙々と修行を始める夜人。

なんだよ 私の後に付いてきた意味ないじゃん…。

「飛鳥、これ、まず復習ねっ！」

さっきの修行よりもハードな内容をこなし、日も落ちてきた頃だった。

「休憩、俺、自分の修行するから、そこら辺で休んでて頂戴」
荒い息を整えつつ、切り株に腰掛ける。

確かに修行はキツかった。でも、心底疲れたという感じはしない。隣でも、ゼイゼイと荒い息がしたので見てみると、夜人だった。

「はあ、腹減った。」

独り言かと無視していると、急に腕を引き寄せられる。

「飛鳥！」

近い！かなり近距離。

夜人の細く、漆黒な髪が額に当たってくすぐったい。

この状況で、私は不覚ながら美形は近くでも見ても美形ということ
を学んだ。

「何？」

早く離れるよという気持ちを精一杯込める。

いつもよりマイナス五度くらい冷やかな声が出た。

「あのさ、」

「何ってば。」

ぐんと距離が又近くなる。

尖った歯が二本、異様なまでに輝く。

この体勢に限界を感じ動こうとするが、夜人の重みでちっとも体は
動かない。

いや、重みではなくて、ほぼ叶わない力で抑えられていた。

「俺……俺……、腹、減った！」

は？

「知らねえよっ！」

くだらないっ！

バシッと腕を払い、体を押し退ける。

一体何？本当、意味が分からない。

怒りで熱くなった体を癒そうと、沙理の所へ行くとんだか入って
はいけないムードが漂っていた。

「あの、漢字では…？」

「俺の名前？えつとね、リュウジのリュウが、流れるって字。んで、リュウジの司は、司会の司って字だよ。君は？」

「あ、えつと、私の名前のサリのサは…」

これ以上居ても存在すら気付いてもらえないだろう。

後で絶対邪魔をしてやろうと誓い、大人しく引き下がると、後ろには修行を終えたのか海実が立っていた。

「お疲れ。」

「そちらこそ。」

短く、そっけないが、両者とも本当に思っている事をそのまま伝えた、という感じだった。

「沙理、弓向いているの？」

「ん…。まあ、良い線はいつてる。」

でも、今は人に向けて打つという心の準備が出来ないらしい。

飛鳥見たいに球だと、急所に当たっても死亡の確率は低いが、弓の場合、相当死亡率は高いからな。」

「心の準備…」

「これから頑張るみたいだけど。医療もね。」

「ふうーん…」

綺麗事ではないが、私も頑張らなくてはならない。

心の準備…。決意…。まだまだ、足りない事ばかり。

かなりの数の物が、欠けている。

「終わったー！」

少し離れた所で、楓らしき声。重い思考モードになろうとした頭を中断する。

「ご苦労。」

「何が出来たの？」

「通信機。さすがに五人分は疲れた。」

こちらに近付いて来た楓が差し出したもの。

通信機。

想像していたのとは全く違っており、見た目も使いやすそうで良かった。

「最初から全て作ったの？」

「多少は前回の通信機の使用材料を使った。」

「うわ、すげえ。俺の分は？」

楓の後から来た夜人の言葉は、楓によつて黙殺された。

「すごい！ですね、機会音痴の私、絶対出来ません。」

「俺の分とかあるのかな？」

いつのまにやら集まった、沙理と流司もちろん流司の言葉も楓によつて黙殺された。

「これ、海実の分。で、これ飛鳥。こっちは沙理。あれ？一匹いねえよ。」

「首輪つけてないの？」

「やば。付け忘れた……。」

「ここだつて！俺様はここにいます！」

とても人間を探しているとは思えない会話をしていると、頭上から声が降ってきた。

「これ、瞳の。置いとくよ。」

「さんきゅっ」

音もなく飛び降りると、嬉しそうに通信機を抱える瞳。

胸ポケットに入れようとするのを、海実と楓が素早く、そして鋭く睨みつける。

「あ、そつか。今度はちゃんと他の場所入れなくちゃ……。」

「……馬鹿……。まあこんな馬鹿ほつといて、」

「俺、なんか寂しい人間じゃん……。」

「昨日も言つたとおり、明日出発。それまでに全てを整えておくこ

と。」

「了解。」

「今日の修行は終了。あとは適当にやれ。以上。」

「了解。」

「そんじゃ、夜御飯でも作るか。海実、手伝って。」

「おう。」

流司と仲良さげな沙理に気を使ったのか、今回は海実を誘って奥へと消えていく楓と海実。

することが無いので瞳で遊ぼうと思った時だった。

「飛鳥。」

「呼び捨てにするなっ。」

性格を除けば、容姿も声も完璧な男。

最初にあつた棘は今、一日もたたない間に感じられなくなった。

「飛鳥。」

特殊手袋を空中に投げて遊んでいる少女。

何人もの人を殺してきたようには見えない姿だ。

「なに？」

少女の方に向かって返事をする。

「俺さ、ちよつと、走ってくるわ。」

え？

「修行したじゃん？」

「あれじゃ何かまだ足りねんだよ、いつてきます！」

さすがに一緒に行くというまでの体力は残っていなかった。

いくら心底疲れていないとはいえ、修行を終えたばかりの体ではキツイと判断した。

「沙理。」

夜人と二人は考えたくも無かったから、沙理に助けを求めるように呼ぶ。

流司と良い感じだろうと関係ない。今は自分優先っ！

「はい、何ですか？もし良かったら、飛鳥さんも御一緒に話しましょうか？」

ニコツと目を細めて笑う沙理。

少し悔しそうに唇をかむ流司は、彼女の視界に映っていない。

「うん、それがいい！」

肩を落とす流司に残念だったね！と同情サインを送る。

本当ですよー、と訴えかける流司は私の視界に映ってない。

早歩きで沙理の隣に座り込み、息をつく。

「飛鳥あゝ」

「呼び捨て禁止。しかもなんであんたまで話に加わる訳？シッシ。」

いつのまにか流司の隣であり、私の正面でもある位置に座っている夜人。

「俺はペットかよー。ってか、おい、りゅー。」

小声で不機嫌ながら、流司です。と訂正する彼は、沙理の笑顔によつて機嫌が直る。

「えっと、リーダーさんは、何という名前なのですか？」

「夜に人と書いて、ナイト。」

「かつこよい名前ですね。」

「名前だけね。」

「酷いな、飛鳥は。」

「だから、なんで呼び捨てなの…。」

「私はサリと申します。沙翁の沙に、ことわりの理です。」

「やべ、全く漢字分かんねえ」

同感でもそれを言わないのは私のプライド。

「リーダー、もっと簡単に言いますと、沙理さんの沙は、さんずいに少ないと書いて、沙理さんの理は、理科の理ですよ。」

「おお、りゅー。分かりやすいな。それ。」

「ありがとうございます。」

その様子を呆れた表情で見る私。

その隣の少女はとても優しい眼差しで二人を見る。

私はこの少女と同じ人間かと問われると、はつきり頷く自信は無かった。

「えっと、さつき流司さんには聞いたんですが、夜人さんは何故忍者になったのですか？」

一体どんな話をするのか疑問を持っていた私は、心底驚いた。

いきなりこんな質問を、あっけからんとして言う沙理は大物だと感心するしかなかった。

「え？は？俺？」

「はい。」

さつきまでのテンションとは違った空気が周りに漂う。

さつと夜人の伏せられた目に、睫毛の影ができる。

「流司は話したのか？」

「はい。沙理さんには言えると思ったし、俺、別に言っても構わない事情ですから。」

「私も聞きたい。」

構わないなら良いだろうと判断して、好奇心を言葉に表す。

一体、この少年はどんな経歴で忍者になったのだろうか。

過去

「えつとですね。一言でまとめるとリーダーに惹かれたんです。」

無表情な夜人。

真剣な流司。

「詳しくいきますとね、普通よりも少し　いや、何倍もの貧乏な家庭に生まれ、母親しか生存していなかった環境の中に俺はいたんです。」

んで、十歳の時。急に母親がいなくなってしまうて。

居場所を失った俺は、どこか知らない森の中にいつの間にかいたんです。

そこで出会ったのがリーダーなんです。

まず正直、見た目に惹かれ、襲われそうになった俺を助けてくれた勇氣に惹かれ…。

一生ついていこうって思ったんです。

同行を許可してもらうのはすごく大変だったけど…。

っなんとかここまで来たって感じです。」

この話は、どう聞いたって軽々しく言える事情ではないだろう思った。

軽々しく聞けるような事情でもない。

十歳というすごく若い年で居場所をなくし、森で彷徨った時はどんな心情だったか。

それに、襲われたって…。え？

「ちょっと、襲われたって…、誰に？」

「なんか俺、その年では、しょっちゅう女の子に間違えられて。確かに髪の毛は伸ばしたままでしたから。

ん、腰よりも長かったと思います。顔はどうだったか知りませんけどね。」

きつと可愛かったよ、うん。

「…それで？」

「それですね、なんか飢えてたっぽい男が二人いて。目は虚ろで、今でもはつきりと思ひ出せますね。

そいつらに、急に、後ろから抱きつかれて…。」

一気に話したのが疲れたのか、呼吸を一度整える流司。

その間に夜人がぼそと補足をする。

「真面目に、やばい奴等だった。

このままじゃあのチビ玩具扱いされると思ったんだよ。

てか、本当に流司、可愛かったんだよなあ。俺も最初女かと思っただぜ？

最初は無視しようかと思ったけど、そこまで冷酷人間じゃねえから助けてやった。」

「そう、だったんだ。」

過去の事だから、と切り捨てているのだろうか。

流司は最後まで表所を崩さなかった。

聞いているこっちが涙しそうな事情だった。

その時、私は何をしていただろう？

いつものように規則正しい生活を送っていた。
あまりにも次元が違いすぎる。

同じ地球上、同じ国内で生きていて、何故こんなにも違うのか。
何故、こんなにも与えられた試練が違いすぎるのか。

小さい頃、神等いないと教わった。

表面上分かりましたと頷いていたが、実はいると思ってた。

冷酷な存在。人の命なんてゲームの駒以下としか思っておらず、気分屋で。

何でも執着を持たない。

やろうと思えば何人も人間を有頂天にも出来るし、更に地獄に落とす事ができる。

恐ろしく、この世の中で一番厄介な存在。

それが神だと幼い頃から思っていた。今もその考えを持ち続けている。

「ちょ、沙理さん、また、」

慌てたような流司の声。

見ると、沙理の目が妙に光っている。と思いきや透明な雫が、少し高潮している沙理の頬を伝う。

沈みかけた陽に反射して、このうえなく綺麗に輝く。

こんなに美しい涙を私は今まで見た事がなかった。

こんなに美しい雫を流している人を、私は今まで見た事なかった。

「え。あ、すいませんっ」

「そんなに感動します?」

いや、感動とは違うだと声に出して突っ込めるほど、私は大物ではない。

「二回も、こんな、見苦しい姿。すいません、」

本当に申し訳なさそうに、肩を縮めて誤る沙理。

「俺の為なんかに泣いても良い事ないよ？」

「いえ、あの、本当、」

二人は自覚がないだろうけど、この甘い空気。

やっぱり入ってこない方が良かったのかもしれない。

「行くか、飛鳥。」

「うん。」

呼び捨てにされているのにも気付かず、そつとその場を離れる私と夜人。

あとがどうなるかなんて最後まで見たいとも思わない。
何を見せ付けられるか分かったものじゃないもんね。

しかも 二人とも自覚無しなのが更に見てられない。

「お、ただいまっ」

食事が運ばれる場所へと足を運ぶと、先着がいた。タオルで滴る汗を拭っている。

「おかえり。」

「どうも。」

「どうもって、変じゃね？あ、てか俺瞳ね。よろしく。」

「俺、夜人っす。」

「飛鳥はまだ渡さんぜよ。まだあげないぞよ。」

「げっ、ばれた？」

「ふっふっふっ、お前みたいな美貌にはもつたいない！」

「それは、おっ」

付いていけない会話に目粉るしさを感じ、妨害する。

このまま意味の分からないことを目の前で話されても困る。

「ちょっと、まった。ストップ。大体何が渡すだよ。しかも何？もったいないの使い方違うしっ。」

「仕方ない、しょうがない、はい、御一緒にっ」

「仕方ない、しょ」

「うっさい！」

再び異世界に行こうとする二人を引き止める。

瞳ワールドに巻き込まれそうになった夜人は、はっと口元を押さえる。

「何にが、仕方ない、しょうがない、だよ。馬鹿。」

「本当は一緒にやりたかったの？なんだ、先に言ってくればよ」
軽く爪先で相手を小突く。

避けるのも造作ないだろうに、瞳はわざとらしく仰け反った。

聞いてみても良いだろうか？

「ねえ瞳？」

「あいよ？なんですかいいい？」

口調程ふざけていない顔。むしろ真剣にこちらを伺っている。

「瞳はさ、どうして忍者に」「飯。出来た。」

単語を組み合わせた言葉。とても低音で、なぜか落ち着く海実の声。
一瞬気になった事を、声に出さず押し込む。

だって。

だって。

「瞳はさ、どうして忍者になったの？」

なんて。

まだ聞くべきじゃない。

瞳は、きつと言いたい事が分かったはず。

だから。

だから。

あんなにも顔を曇らせたんだ。

だから。

あんな顔をしたんだ。

夕御飯

「飛鳥あゝ？飯いくぜっ。」

満面な笑みを浮かべた瞳。

一瞬翳りを帯びた目はそこにはなくて。

「うん。あれ？楓は？」

「もう来る。」

「お、楓。いつにもまして旨そうじゃんっ！」

「当然っ。なんてね。」

アルト声が軽く返ってくる。いつもより柔らかな表情を浮かべた楓。

「あの二人は？まだイチャつき中？」

「あ、ご飯。ありがとうございますっ。」

「美味しそう！」

ナイスタイミングで現れた二人。皆の冷やかしの目に全く気づいていない。

「今日はいつもより多めだから。」

「あ、ありがとうございます。」

「俺達の分？」

「いや、全部俺が食うからっ。」

「瞳、まだ食うつもり？」

和気藹々とした中、自然と会話が弾む。

今までになかった事。

命令でも、怒鳴っている訳でもなく、笑顔で朗らかに話している。

瞳や楓、海実や沙理。

そして夜人や流司と話すと、こんなにも自分が変わるものかと自覚せずにはいられなかった。

「んじゃ、揃ったし食うか。」

「いったき〜！」

鍋を取り囲み、昼間よりも多い量が入った御飯を食べる。

何の料理かは知らないが、ともかく美味しいという事だけは分かった。

「これ、何の材料使ってるんですか？」

「ああ、山菜。沢山取れるし。」

「こちらの汁物は？」

「実はほとんど同じ材料。味付けを変えて、見た目も少し違っただけ。」

「そう、なんですか。同じ材料なのに違った味になるんですねっ。」

「なあ〜、楓〜、今日こそ、俺勝つよ〜。」

「また勝負？ いいけど。うちが勝つよ？」

「いや、今回は夜人様も参加するぜっ。」

「いやいやいや、駄目だから。俺の食べる量減るじゃないかっ。」

「そうっすよ、リーダー。ゆっくりいきましょよ。」

「りゅ〜、もやりたいか？」

「そ、そんな、まさか。飛鳥さん、何かいってやってくださいよ〜。」

「うっさい！ 今食べてるの。」

「飛鳥もやるか？」

「やんない！」

眉をひそめながらも内心すごく楽しんでいた。

こんな時間が来ると思わなくて。

一生お嬢として城に閉じ込められる日々が続くと思ってたから。伸び伸びと過ごす事なんて、一生無いとあきらめていたから。

むしろ、望む事を許されなかった。

「ご馳走様でした。」

「私も、もういいや。」

先に食べ終わつたのは昼と同じく、沙理と海実だった。その数秒後に私もご馳走様と呟く。

「俺も、もういいや、ごちそうさんでしたっ」

流司も腹をかかえて手を合わせた。

「ああゝゝゝ！もう、俺無理だっ！すごい食欲だな、二人ともっ。俺、初めて自分より食う奴見た。」

限界だあゝ！と言わんばかりに大の字に寝る夜人。

残った二人はお互いを睨むようにして残った食料に食らいつく。

「ふがあがつ」

「ちゃんと飲み込んでから話せよっ」

……もちろん両者とも完食の為、引き分けだった。

「くそ、次こそはっ！」

「瞳、明日からは決まった量だけだからな。」

「まじかよゝ、ちえっ、しゃあゝないなゝ。」

「んじゃ、今日のディナーは終了。後は自由。」

「飛鳥ゝ！俺と散歩しよお。」

さつき走つたらしいがまだ森を探索したらしい瞳。

特に断る理由も無いので、分かったと頷く。

「沙理さん、さつきすっごい淡い感じの花見つけたんすよ。」

「え？あ、見たい、です！でも、御飯の片付けが終ってから行きま
すね。」

「沙理、行って来い。片づけは私と夜人でやるから。」

「え？ちよつと、俺っすか？うげ、飛鳥の後ついていこうと思ったのに。」

「ちよつと、飛鳥は俺のだからあげないよつ。」

ちよつとまで、瞳。なぜ私がつっこもうとした所で、変な事言ってるんだよ。

てか、夜人。ついてくるな。

「っけ。」

「いいから。早く手伝え。」

「…了解しやしたあ。」

海実の後につづいて鍋を運んで行く夜人。

楓は寝転がって空を見上げていた。

「楓、何してるの？」

星。うち、星好きだから。小さい頃から星ばっか見てた。」

星を見上げている楓は、なんともいえぬ表情だった。

無表情とは違う、言葉で表せない表情だった。

「あゝすゝか、行こうぜつ。」

「あ。うん。」

トントントン

軽い足音。

遙か手前を歩く瞳の短髪が左右に揺れる。

辺りは真っ暗で。何故か夜人の髪の毛を連想させる。

「飛鳥、木に登ろつ。」

「こんなに暗いのにな？」

「違う。暗いから登るんだよ。」

スルスルと猿以上のお手前を見た後、ほぼ引つ張り上げられる状態で枝までたどり着く。

「うひよ。気持ちいい風っ」

高い所があまり平気でない私は、暗闇に感謝した。
視力の良くない目では、下が見えないからだ。

「涼しい〜。」

瞳みたいに両手を離す事はできなかったけど、太い枝の上でそっと包み込むような風に飲まれた。

『そつと幹に口寄せ

魅惑の樂園辿り着く

婉曲な告白と共に

淡い己の真偽知る』

それが歌という事を認識するのに時間が掛かった。

言葉を繋ぎ合わせ、ただリズムに合わすなんてものではなかった。
流れる風に身をまかせ、記憶に残せない旋律。

すうっと溶けていく歌。どこか寂しげで。

「…飛鳥？」

「今の、歌？」

「当たり前じゃん。俺が歌ったんじゃないけどねっ。」

甘く、引き込まれる声だった。

この声をもう一度聞く為ならば、体の一部を捧げても良いなどと狂
気じみたことを思ってしまった。

「誰？」

「さっきの歌声の持ち主？」

「うん。誰？」

「あたし。」

危うく木から落ちそうになった所を瞳が支える。

いつの間にか私のすぐ後ろに一人の眼鏡を掛けた少女がいたからだ。
「飛鳥 ちゃんだよね？あたしは、魅夜。瞳と元同じグループの中で唯一今も仲間だよ。」

夕御飯（後書き）

女忍者17話目になりましたっ

ここまで見てくださって本当にありがとうございますっ。

詩の方も、読者様がいてくれて感謝でいっぱいです……。

まだまだ修行が足りませんが、これからもよろしく願いいたしますっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4026d/>

女忍者～呪われしき宝石頂戴グループ～

2010年12月22日14時43分発行